

食道胃静脈瘤について

先月号で、C型肝炎の治療について報告しましたが、慢性肝炎は治療しないと次第に肝硬変に進行します。肝硬変になると、吐血、要するに口から血を吐いて、生死に関わる状態になるという話を聞いたことがある人は多いと思います。それが食道胃静脈瘤の破裂です。

さて、食道胃静脈瘤とはどんな病気なのでしょうか。肝硬変などで門脈圧が上昇し、その結果食道や胃の表面の静脈が太くなって瘤（こぶ）状になるものです。破裂すると吐血や下血がおこり、大出血で死に至ることも少なくありません。肝硬変の代表的な死亡原因のひとつです。

原因

腸で吸収された栄養分は、血液に混ざって門脈という血管を通過して肝臓に送られ、そこで処理されて自分の体で使えるものになります。しかし、肝硬変では肝臓の働きが弱っているため、本来肝臓へ送られるべき血液が滞るために、門脈の圧が上昇します。すると血液は別の道を通って心臓に戻ろうとし、その道のひとつが食道や胃の静脈で、本来細かった血管も流れる血液が多くなると、太くなって瘤状になります。

症状

出血しない限り、自覚症状はありません。突然の吐血や下血で初めて気づくことが多いので、手遅れになってしまう危険があります。

肝臓が悪い人は、自覚症状はなくても、定期的に内視鏡検査をうけることが大事です。

治療

それでは、静脈瘤が破裂したらどうしましょう。

迷わず救急車を呼んで内視鏡専門医のいる病院へ、運んでもらってください。

治療は、内視鏡や外科的、放射線科的におこないますが、近年ほとんど内視鏡で治療します。

内視鏡治療にはO-ringという輪ゴムで静脈瘤をくくってつぶす内視鏡的静脈瘤結紮（けっさつ）術（EVL）と、血管内に薬を注射して血液が流れないようにする内視鏡的硬化療法（EIS）があります。

緊急出血例に対して止血するにはEVLが適し、静脈瘤の再発、再出血を抑えるのにはEISが比較的優れ、症例にあわせて選択されます。

胃静脈瘤の破裂は、食道より治療が難しく、一時的にEVLやEISで止血しても再出血する可能性が高く、それに対して近年用いられるのが、バルーン下逆行性経静脈的塞栓術（B-RTO）という治療法です。カテーテルを胃静脈瘤まで挿入して、硬化剤を注入します。非常に治療効果が高いのですが、まだできる施設が限られています。

当院では、静脈瘤の専門家で作られている「門脈圧亢進症学会」の評議員である消化器内科部長を中心に、上記治療を積極的に行っています。

肝臓が悪いと言われた人は、一度相談してください。